

誕生日のラムケーキ

庄野潤三

庄野潤三

誕生日のラムケーキ



講談社

誕生日のラムケーキ

一九九一年四月二〇日 第一刷発行

著者——庄野潤三
しやうのじゆんざう

© Junzo Shono 1991, Printed in Japan



発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―三―三 郵便番号二三―〇一

電話

文芸図書第一出版部(〇三)五三九五―三五〇四

書籍第一販売部(〇三)五三九五―三六二二

書籍製作部(〇三)五三九五―三六一五

印刷所——株式会社精興社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一六〇〇円(本体一五五三円)

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

目次

I	おるす番	10
	たき火	12
	驢馬	14
	浦島太郎	16
	荒野の苔	18
	長女の宅急便	20
	花鳥図	22
	スープ	24
	誕生日のラムケーキ	26
	大きな犬	28
	赤毛のアン	30
	神奈川と私	34
	一番咲きの薔薇	38

サヴォイ・オペラ年表	43
金物屋まで	47
やきものの好き	50
九州との縁	52
今年の秋	56
春を待つ	58
私の夏の愉しみ	61
梨屋のお嫁さん	62
エイヴォン記	66
子守りの一日	70
南足柄行	73
誕生日のアップルパイ	78
喜びの種子見つけて	82
旅のプログラム	85

劍幸の退団を惜しむ

91

ウエバーさんの手紙

94

能登の毛がに

100

II 「夕べの雲」

106

最初の小説

109

丹下氏邸・エリア随筆

111

『ブロードウェイの天使』

114

井伏鱒二「へんろう宿」

118

佐藤春夫『お絹とその兄弟』

121

会計簿と

「チェーホフ読書ノート」

122

昔のノートから

127

近況

130

	ユニバーシアード讃歌	132
	慶同ラグビー	135
	コニヤック市営競技場	138
	病院の早慶ラグビー	141
	病後の私	144
	日豪ラグビーの思い出	147
	スコットランド応援	150
	米国カナダ遠征	153
	米国ラグビーの将来	156
	フェアプレー	158
	香山蕃『ラグビー』	160
III		
聞き手と語り手	「丑寅爺さんと」と詩碑除幕式	164
170		

老いての物語

一枚の写真

野々上さんの新著

「グラッ返り」

南の島のまどさん

大竹さんから聞いたこと

祝辞

歌集『利根川の漣』

大事なこと

『丘の橋』

島尾敏雄を偲ぶ

気儘な附合い

藤澤さんを偲ぶ

「少年パタシユ」

220 216 212 209 205 204 198 197 195 192 188 181 177 175

草野さんを偲ぶ

「ボタンとリボン」

山本さんと牛乳

「イースター・パレード」

のびやかに明るく

古木鐵太郎全集

童心

文章の力

井上さんを偲ぶ

あとがき

269

264

261

243

238

234

232

230

225

223

装画
装幀
吉原英里
川島羊三

誕生日のラムケーキ

I

おるす番

宝塚歌劇団花組の公演をみんなで観に行くことになった。みんなとは、妻と長男の嫁と次男の嫁と小田原に近い南足柄から駆けつける長女と、宝塚を観るとき、いつも切符の世話をしてくれる友人の阪田寛夫と私の六人である。

当日、朝、打ち合せた通りの時間に近所にいる長男の嫁のあつちゃんと次男の嫁のミサヲちゃんが連れ立って来た。天気はいい。妻はミサヲちゃんに会うなり、いちばんに、「フーちゃん、どうしていた？」

と訊いた。

ミサヲちゃんが花組の公演を観に行けるように、この日、次男は会社の休みを取って、三歳になる孫娘といっしょに留守番をしてくれる。だが、母親が朝から出かけるとなると、孫娘のフーちゃんが泣いたりはしないかと心配したからだ。前にもミサヲちゃんが友達の結婚式に出かけたあと、フーちゃんは荒れて、お父さんを困らせたことがあった。もっとも、このときはミサヲちゃんはフーちゃんに何も話さずにこっそりと家を抜け出したのがよくなか

った。よく訳をいい聞かせると、フーちゃんも無理をいわないことが分った。

ミサヲちゃんは、

「はじめは少し泣きましたけど、家を出るときは、手を振って、早く帰ってねといいました」といった。私たちはそれを聞いて、安心し、よろこび勇んで駅へ行く坂道を急いだ。

(毎日新聞夕刊／平成2・1・8)

たき火

庭の落葉を集めて妻がたき火をしているところへ、お使いの帰りのミサヲちゃんがフーちゃんを連れて寄ってくれた。

フーちゃんは、近所に住んでいる次男の三歳になる孫娘である。去年の十二月の半ばごろのことだ。

妻が、

「おいも、焼こう」

といったら、フーちゃんもお母さんのミサヲちゃんもよろこんだ。いい具合においしい金時いもの細長いのがひとつだけ、残っていた。それを落葉のたき火の中に埋めた。

掃きよせた落葉を妻が段ボール箱に入れてやると、フーちゃんは持って行って、たき火に落葉をつぎ足した。それから、お茶にした。フーちゃんはお餅のいそべ巻を食べた。

帰るころになって、

「もうおいも、焼けたかな」といって、妻が金串で突き刺してみた。焼けている。これはお

土産に持って帰ることにした。フリーちゃんはよろこび。

端の方を少し切って、書斎のピアノの上の父母の写真の前にお供えする。

妻が、お供えの切れはしを持って、

「お供えしよう。お供えしよう」

といいながら、書斎へ入って行くと、ついて来たフリーちゃんは、ピアノの前でふかふかとお辞儀をした。あんまり大きなお辞儀をしたので、その拍子にピアノの椅子にフリーちゃんの頭がこつつんこした。布張りのまるい椅子だから、痛くはなかった。

(毎日新聞夕刊／2・1・22)

驢馬

友人の小沼丹から葉書が来た。

「散歩道の途中に驢馬と山羊がいます」というのが書き出しの第一行である。

小沼にはいくつか散歩のコースがあつて、その日その日の気分でAのコースへ行ったり、Bのコースへ行ったりするらしい。驢馬と山羊のいる方へは暫く御無沙汰していたのだが、今日通つてみたらしいというのである。

ここでちょっと註を入れると、去年の暮れに近いところに、小沼夫妻と小田急の成城学園の駅で待ち合せて、近くの喫茶店でコーヒーを飲んだ。奥さんの話では、近頃、小沼はちっとも散歩をしないという。天気がいいから、ちっと外を歩いて来たらと奥さんがいうと、行こうかなと思つていたところだが、お前がいうから止めた和小沼がいう。そんな無茶なことをいって、歩こうとしない。

そこで、私は毎日、二時間くらい歩いていると話した。趣味の問題だから、押しつけるわけにはゆかない。ところが、次に小沼から来た葉書を見ると、あの翌日から早速歩いていま